

蓮如書写本第二章（ただし段落と番号①～⑬は加来が便宜的に分けた）

- 一 ①おのゝの十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずしてたづねきたらしめた
まふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。
- ②しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、
こゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。
- ③もししからば、南都・北嶺にもゆゝしき学生たち、おほく座せられてさふらうなれば、
かのひとにもあひたてまつりて、往生の要よくゝきかるべきなり。
- ④親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせを
かぶりて信ずるほかに、別の子細なきなり。
- ⑤念仏は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてや
はんべるらん。総じてもて存知せざるなり。
- ⑥たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべ
からずさふらう。
- ⑦そのゆへは、自余の行もはげみて仏になるべかりける身が、念仏をまふして地獄にもお
ちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよび
がたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。
- ⑧弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。
- ⑨仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。
- ⑩善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。
- ⑪法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらう
か
歟。
- ⑫詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。
- ⑬このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひ
なりと {云々}。

（対応箇所『聖典』〔初版〕626－627 頁＊以下『聖典』は、東本願寺『真宗聖典』〔初版〕）

【前回の問いから】

（問 1）第二章の師訓の歴史的背景について、日蓮の四箇格言の「念仏無間」や善鸞義絶事件のことが考えられるのではないか。

（問 2）「たとひ…地獄におちたりとも」は嘆仏偈の「たとひ」とはその意味あい異なるように感じるがどうか。

「たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。」

「たとい、身をもろもろの苦毒の中に止（おわ）るとも、我が行、精進にして、忍びて終（つい）に悔いじ」（『聖典』13 頁）

I 二尊二祖の相承（『歎異抄』の仏教史観）

⑧弥陀の本願まことにおはしますば、釈尊の説教虚言なるべからず。 ⑨仏説まことにおはしますば、善導の御釈虚言したまふべからず。 ⑩善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごととならんや。 ⑪法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらう歟。	⑧弥陀の本願が真実であらせられるならば、釈尊のご説教が偽り言のはずがありません。 ⑨釈尊のご説教が真実であらせられますならば、善導大師の御解釈が偽り言を言われるはずはありません。 ⑩善導の御解釈が真実ならば、法然聖人のお言葉が、どうして偽り言でありましょうか。 ⑪〔その〕法然聖人のお言葉が真実ならば、この親鸞が申します趣旨も、同じように、根拠のないはずはございませんよ。
---	--

・訳の問題点について

- 「まこと」——「真実」
- 「虚言」——「偽り言」
- 「仏説」——「釈尊のご説教」
- 「おほせ」——「お言葉」
- 「そらごと」——「偽り言」
- 「むね」——「趣旨」
- 「むなしかるべからず」——「根拠のないはず」

・二尊二祖の相承

伝統的に、この「弥陀の本願まこと」からの一段を善導の『観経疏』の就行立信に対して就人立信に当て、二尊二祖の相承として位置づける。

金子大栄は第二章の主題を「念仏の伝統」とする。とくにこの段については、「その弥陀の本願まことにといふことから説き述べらるゝ心持といふものは善き人の仰せといふものと、弥陀の本願といふものと別なものでないといふことをこゝに顕はさるゝのではなからうか」（金子大栄『歎異抄聞思録』COMA LIBRI No.12・178頁）「釈迦の教へといふものを離れて弥陀の本願といふものを聞くことはできないのであります」（『歎異抄聞思録』COMA LIBRI No.12・179頁）「善き人を通して弥陀の本願といふものは始めて現実のものである。」（『歎異抄聞思録』COMA LIBRI No.12・179頁）などと述べている。

・なぜ二尊二祖の相承をあげるのか。

- ・対告衆（関東の門弟たち）には善導法然の名がもっとも効果的だから。
- ・念仏よりほかに往生のみちを求めているから。（念仏往生）

（以上、藤秀翠）

・「よきひとのおおせ（師口伝）」の伝統をあげる。——「経巻相承・超越相承」（曾我量深『歎異抄聴記』の指摘）

・二尊教

浄土の教えが二尊教であること——「信仰の健康性」（安田理深）と信仰の病
気・病気の信仰——教主（釈迦・人・外縁）と救主（弥陀・法・内因）との区別
があることがその信仰（一心）が健康であることを証明する——二河白道の譬喩に
ついて——発遣と招喚——弥陀・釈迦の次第か、釈迦・弥陀の次第か。

「二尊の大悲に縁りて一心の仏因を獲たり。」

（『浄土文類聚鈔』、『聖典』421頁）

二尊教ということがはっきりしたときに口伝が「まこと」であることの意味が明
確になる。とくにここでは本願に立って真実の言葉を語った「よきひと」の伝統が
示される。

弥陀	法	願言（みこと）	超歴史
釈尊	人	教説（みのり）	歴史

教主のみの問題点

救主のみの問題点

・なぜ伝承が弥陀の本願からはじまるのか

「釈迦・弥陀」の次第か、「弥陀・釈迦」の次第か。

「弥陀〔誓願不思議に〕〔の本願まこと〕にたすけられまいらすべし」

・「まこと」

「まこと」——教法が「まこと」であることを確保する源泉は何か。何が教法の
真実性を担保するのか。——教法の真実性は、「弥陀の本願まこと（真言）」にか
かっている。「弥陀の本願まことにおわしませば」から始まる意味——「弥陀の
本願」は、一如よりかたちをあらわす意欲を物語として示す表現——阿弥陀の名に
象徴される本願「清浄意欲」（『摂大乘論釈論』）、「究極的関心」（P・ティリッ
ヒ）によってのみ宗教の言葉の真実性はただしく基礎づけられる。

教条主義（dogmatism）・功利主義・実利主義

・「まこと」とはなにか——「真言」——「如来如实言」——「聖人のおおせに
は、「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり。……煩惱具足の凡夫、火宅無常
の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなき
に、ただ念仏のみぞまことにておわします」とこそおおせはそうらいしか。」

（『聖典』640－641頁）

よろずのこと（万の言）
そらごと（虚言・空言）——仮？——真実
たわごと（戯言）——偽？——真正
まこと——真実

・「まこと」の展開——「本願」→「説教（仏説）」→「御釈」→「おほせ」「もうすむね」

弥陀の本願—釈尊の説教—善導の御釈—法然のおほせ—親鸞がもうすむね
本願念仏の歴史を貫く「まこと」 これは根源語、声なき声であろう。

・よきひとの伝統

弥陀は法、釈迦は人をあらわすが、ここでの「弥陀の本願」は抽象的な真理ではなく、人格的にはたらきとして受けとめられている。歴史的な人を生み出す真理（第一章を参照）——人を通した教えがなければ真理を知ることはできない。——「法は人によりて尊し」しかしそれにとどまれば、人や教義の奴隷になるしかない。——依法不依人——四依の問題（『聖典』357－358 頁）

・二尊二祖の伝統——「『観無量寿経』の伝統」（正親含英）——この場合、弥陀の本願とは何を指すのか。

二尊 「弥陀の本願」「仏説」……「まことにおはしまさば」
二祖 「善導の御釈」「法然のおほせ」……「まことならば」
→「親鸞がもうすむね」

・「まさば」・「ならば」

「さば」「らば」は、未然形＋助詞「ば」で仮定の条件をあらわす。

どうして「おわしませば」（已然形＋ば）と「身なれば」と同じように既定条件で表現されなかったのか。門弟たちへの問いかけの意義をもつからか。

「悉く施設的の表現となつておりながら、意味はあらゆる断定的の表現以上に、断定的のひびきをもつてゐることに気づくのである。…施設的な言葉であるけれども、「なるべからず」の文字の強さによつて、強い断定的の響きをあたへるのは不思議である。もし「弥陀の本願まことにおはしませば、釈尊の説教虚言にあらず」というやふに書きかへるならば、われわれはその表現の弱さに堪へないであらう。」（藤秀翠『講讃』201－202 頁）

・親鸞にとっての「むね」「むなし」の問題

「むねまでもてむなしかるべからず^かさふらう歟」——親鸞にとっての「むね」と「むなし」・「空過」という問題

「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みち
みちて 煩惱の濁水へだてなし」

(『高僧和讃』天親菩薩、『聖典』490 頁)

「曠劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき 本師源空いまさずは
このたびむなしくすぎなまし」

(『高僧和讃』源空聖人、『聖典』498 頁)

Ⅱ 愚身の信心

^{せん} ⑫詮ずるところ、愚^身の信心におきては かくのごとし。 ⑬このうへは、念仏をとりて信じたてまつ らんとも、またすてんとも、面々の御はか らひなりと {云々}。	⑫結局のところ、〔この〕愚かな^私の信 心においては、このようなものです。 ⑬こう申し上げたからには、念仏を採用し てお信じ致そうとも、あるいは捨てようと も、^{皆さん各自}のお考え次第です。……
--	--

・訳の問題

「身」——「私」

「面々の」——「皆さん各自の」

・「詮ずるところ」

国語としては「詮ずる所」は「つまり」「つまるところ」という意味である。ただ詮の字
義が、言+全からなり、音符の全はそなわるの意味であることから「そなわっている説明」
の意味をあらわし、「ものの道理を詳しく説きあかす」の意をもっている。

・「愚〔かな〕身」の自覚という伝統

善導……「我等愚痴身 曠劫来流転 今逢釈迦仏 末法之遺跡 弥陀本誓願 極樂之要
門」(『観経疏』玄義分、『聖典』147 頁)

法然¹……「一文不知の愚どんの身になして、」(『一枚起請文』『聖典』962 頁)。

親鸞……「いづれの行もおよびがたき^身」「愚禿釈親鸞」

・「身」の「心」……「愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり。」(『愚禿鈔』『聖典』
423・435 頁など)

¹ 「十悪愚痴の法然房」「故法然聖人は、「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」と候いしことを、たしかにう
けたまわり候いし」(『末灯鈔』第六通、『聖典』603 頁)、「浄土門の修行は愚痴にかへりて極樂にむまると」
(『西方指南抄』下本、『真聖全』四・219 頁)

- ・「おきては」

「愚身の信心におきては」と「親鸞におきては」との表現の呼応。

- ・「面々の」

「おのおのの……御ころざし……おぼしめして」と「面々の御はからひ」

「おのおの」は、和語で、自分自身の意を表す名詞オノ（己）の疊語。代名詞としては「二人称で多くの人に向かって呼びかけるときに用いる。あなたがた」。「面」は人の顔を表す象形である。「面々」は、漢語では「各方面」、国語では「一人一人」の意とされる（『漢辞海』）。

信仰における選びが一人ひとりの主体的な決断であること、また師と弟子との関係の健康性をよくあらわす言葉。

- ・「とりて信じたてまつらん」と「すてん」

主体的な決断——選択——「念仏をとりて信じたてまつらんともまたすてんとも」——「念仏よりほかに」「ただ念仏して」「念仏して地獄におちたりとも」などの表現との対比——ちなみに藤秀翠は「たてまつらん」を念仏に対する敬語であることに注意を促している（『講讃』208頁）。

Ⅲ 第二章と第十二章との照応